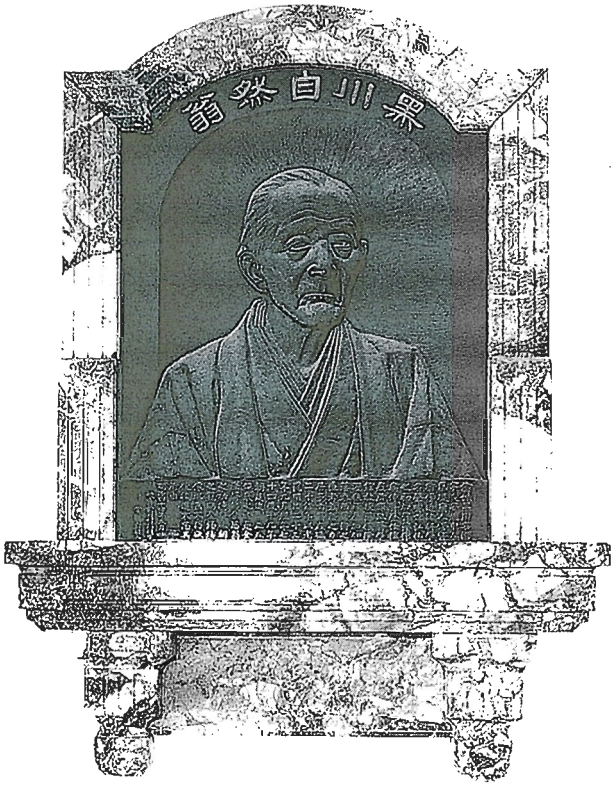
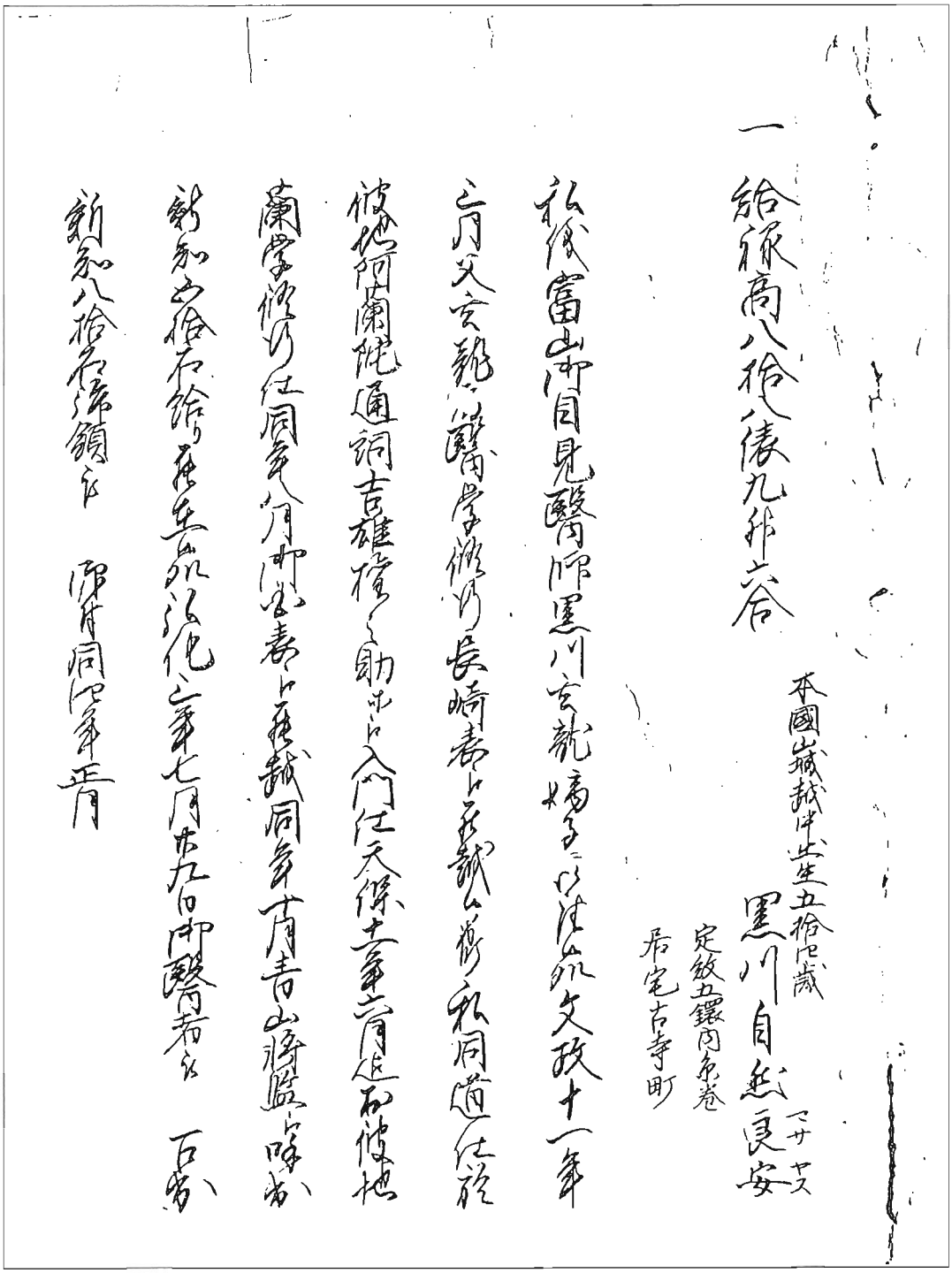
北陸における近代医学の源流



金沢大学医学部
記念館資料室



《表紙写真》医学部玄関の黒川自然翁銅牌
上記は、明治３年（1870）、黒川自然が金沢藩に提出した自筆先祖由緒書の第一頁
（金沢市立図書館加越能文庫蔵）

金沢大学医学部の淵源は、文久２年（1862）３月加賀藩が種痘所を黒川良安らに命じて金沢市彦三八番丁に設置した時に遡る。つづいて藩は卯辰山養生所を開設し、明治３年（1870）には大手町に金沢医学館を開館、翌４年蘭医スロイス着任し、近代医学教育が始められた。

以来、医学館は医学所、医学校と改称し、明治17年（1884）石川県甲種医学校に格付けされ、東京大学の医学士達によりドイツ医学が教導された。のち、明治20年（1887）官立第四高等中学校医学部、第四高等学校医学部、金沢医学専門学校、金沢医科大学（1923）、金沢大学医学部（1949）と内容規模を充実発展させて今日に到っている。

大正５年（1916）、金沢医学専門学校創立25周年を記念して『記念館』が建設され、学生達の多彩な行事集会場所として永年活用されてきた。半世紀を経て老朽化したため、昭和47年（1972）十全同窓会が中心となって旧記念館が改築された。以来、その１階を資料室として、逐年貴重な医史料を収集して展示し、今日では規模は小さいが内容の充実した医学博物館として関心高く利用され評価されている。

黒川自然翁像（医学部玄関）

黒川良安は北陸における蘭学の祖で、多大の功績を残した。明治23年（1890）９月28日没、明治42年（1909）９月贈正五位を賜う。金沢市医師会はこれを記念して自然像の銅牌の建設を発起し、約690円（うち銅牌製作費480円）を募金して、明治43年末（1910）に完成をみた。銅牌は当時の学校の本館玄関に掲架された。題字は侯爵前田利為、撰文は宮川熊三郎で製作者は水野朗である。昭和18年（1943）政府は戦時下の非常金属回収令を発し、本学の校庭にあった木村孝蔵、金子治郎、高安右人、小川勝陳の銅製胸像は全て撤去回収されたが、時の学長石坂伸吉の反骨により自然翁像のみ残された。（写真は明治23年春の小照）

津田淳三、大田美農里、田中信吾の肖像画

大正３年(1914)４月石川県医師会定例総会で、石川県の医学振興に功労のあった津田淳三、大田美農里、田中信吾の三氏を顕彰することに協議決定し画家早田楽斉に委嘱して肖像画を製作し、掲額して功労を讃えた(大正５年，1916)。画家早田は著名な人物画家で、現存する貴重な作品として評価されている。

津　田　淳　三

大　田　美農里

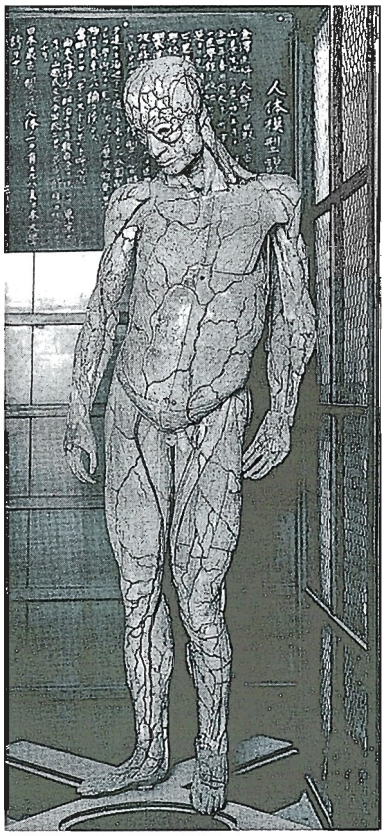
田　中　信　吾

キンストレーキ

明治元年(1868)７月29日藩主慶寧公の医学館創設の命を受けて黒川良安は子息誠一郎（藩命により藩士らとフランスへ留学のため長崎より出立する)、門弟横井三柳を伴って金沢を出発して長崎へ向かった。

長崎で医学館創設に必要な医書、器械のほか、人体模型（キンストレーキ）を求めて、黒川は明治２年(1869)５月25日帰藩した。諸準備成り、医学館は明治４年(1871)３月蘭医スロイスの到着を待って開館した。

キンストレーキは、わが国最古の人体模型で、開館後多くの医学生が、明治20年(1887)以降の直接に人体解剖に接する頃までこの模型により人体構造を学んだ。



スロイス、ホルトルマン、ローレッツ

金沢医学館が開館され、明治４年(1871)３月かねて来日招聘していたオランダ軍医P.A.Sluysが金沢へ到着し、早速医学教育が開始された。彼の教育ぶりは金沢大学医学部百年史に詳述されている。明治７年(1874)９月スロイスは任期満ちて帰国、翌年７月後任として蘭医A.Holtermanが着任し、スロイスの行なった医学教育の補完を果たし、明治13年(1880)８月金沢を去った。この二人の講義録は現在金沢市立図書館藤本文庫に収蔵されている。ついで、A.von Roretzが愛知医学校から着任したが、約６ケ月滞在して山形医学校へ去った。

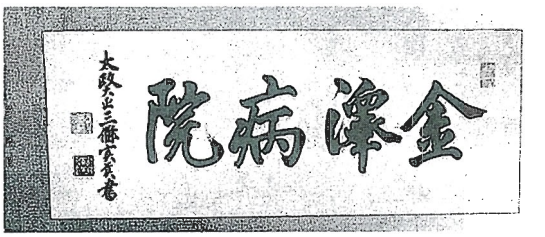
スロイス

ホルトルマン

ローレッツ

金沢病院題字額（三条実美書）

明治９年(1876)８月、金沢大手町の金沢医学館は、医育と医療部門を分離して、病院は公立の石川県金沢病院となる。病院長に大田美農里が命じられ、同時に富山病院、福井病院を分院として設置し翌年医学所を併設して、金沢から教師を派遣した。



金沢病院題字額（三条実美書）

太政大臣三条実美が石川県令の要請により贈った題字で、これを原版とした金文字の木製額が作製され、病院の玄関に掲額されていた。この額も現在保存されている。

石川県金沢病院は明治９年(1876)以降、医学校の変遷にかかわりなく石川県の所管となり、大正12年(1923)の医科大学昇格の段階で、ようやく国立へ移管となる。この間の県費の支出は莫大であったことは云うに及ばない。

金沢病院ノ記（桐山純孝）

明治12年(1879)６月、金沢大手町に隣接の松平大弐邸跡（殿町、現在のＮＨＫ金沢放送局）に金沢病院が新築落成した。建築費は前田家はじめ病院教職員、豪商らの寄附によった。

この病院新築を記念して、県令桐山純孝が「金沢病院ノ記」を贈った。

金沢病院ノ記（金沢大学医学部蔵）

卯辰山養成所図面

第14代藩主前田慶寧は、福沢諭吉の「西洋事情」をみて、欧州の医療施設、貧民救済所等の社会事業に大いなる関心をもち、慶応３年(1867)金沢卯辰山に一大社会福祉施設の集落を建設した。

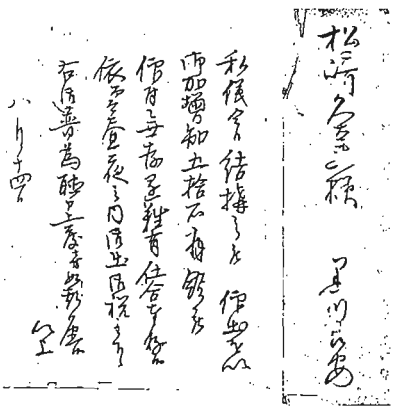
本学百年記念事業として十全講堂が建設された際、真柄建設（真柄要助社長）が卯辰山養生所図面の所蔵を申し出た。

後年、図面は一括医学部へ寄贈された。因に真柄は養生所建設の棟梁であった。

卯辰山「開拓録」より

黒川良安の書状

黒川良安は慶応３年(1867)８月養生所詰を命ぜられ、禄五拾石を加増された。良安はこれを記念して親族を招いた。この書状は親族の一人松崎久太夫に宛てたものである。



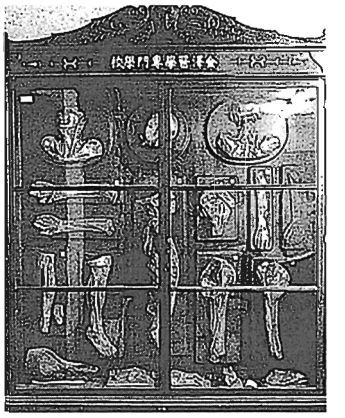
「私儀今日結構之被仰出を以、御加増知五拾石拝領被仰付て無存懸難有仕合奉存候

依而今昼夜之内御出御祝被下度、右御晋為聴申上度旁如斯御座候

八月十四日　　以上」

現存する良安の唯一の書状で藤井信英が発見して医学部へ寄贈された。

人体解剖模型



石川喜直教授は初代第２解剖学教授として解剖学を教授した(1900～1913)。特に実習に力を注いだ。教授は大阪府立医学校助教諭時代に島雪洞について彫像術、中谷省吾について石膏模型術、蝋粘土模型術を学ぶ。掲架された一連の模型は同教授による手造りで芸術作品といえよう。

部分人体模型

キンストレーキとともに黒川良安が長崎で求めて帰った「心臓」「後腹壁」の模型である。２個の心臓のうち、１個はキンストレーキに内臓されていたものである。

海軍軍医中将鈴木寛之助

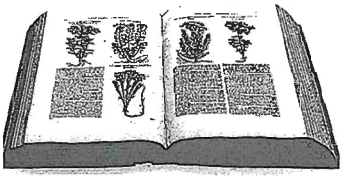
故海軍軍医中将鈴木寛之助は明治29年(1896)第四高等学校医学部を首席で卒業し、翌30年海軍少軍医候補生として海軍軍医の道を歩んだ。日露戦役に従事し、長く軍医長として欧米各国を訪れ、軍陣外科等の指導者として令名をはせた。後、舞鶴海軍病院長、海軍軍医学校長を経て横須賀海軍病院長となり、大正14年(1925)４月22日脳出血のため急逝、生前より「死後我ガ骨格ヲ金沢医科大学ニ寄贈シテ其ノ保存ニ委スベシ」の遺言により遺体は横須賀より金沢へ移送され、病理学中村八太郎教授の執刀により病理解剖され、後解剖学教室で晒骨されて骨格標本が作製された。

皮膚病模型

長い間医学部の地下倉庫におかれていた皮膚病のムラージュが昭和59年(1984)7月に医学部記念館の一室に収納された。ムラージュは現在219個あり、すべて皮膚科学の初代教授であった土肥章司によって備えられた。土肥は大正元年(1912)に当時の金沢医学専門学校教授として着任のとき、教材としてムラージュを東京大学から80個購入、その後教室内で100個余りを追加作製した。

ムラージュはどれも黒い木箱に入っており、木箱の下縁に「Prof.k.Dohi.Tokyo」左端に「東京医科大学皮膚科教室伊藤有製作」と記してあるものが東京大学製、そのような記名のないものは土肥や教室員の指導のもとに技官の斎藤要三郎によって製作された。ムラージュ製作に関する苦心は今は知る由もないが、当時ムラージュ製作の技術をもった人が少なかったことから、本学のムラージュは質の点でも量の点でも全国の医科大学中有数のものとして伝えられ、貴重な資料とされている。

ドドネウス和蘭草木誌



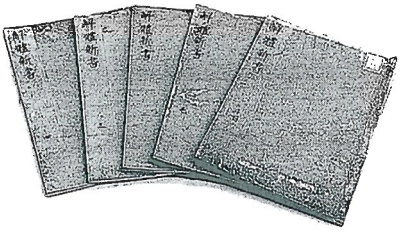
Dodonaeus,Rembertus

Herbarivs oft Crvydt-Boeck:Antwerpen.1644,

1492頁,　(39×25㎝)

前田細紀が延宝年間に注文した三方金彩色版の「和蘭本草書」である。東京大学理学部に1608年ライデン版、早稲田大学と東京国立博物館に1644年アントワープ版を夫々蔵している。「蘭学階梯」にいう「ヘルバリウス・コロイドブーク」とは本書の事である。本書には野呂元丈訳「阿蘭本草和解」、宇田川玄随訳「遠西草木略」をはじめ種々翻訳があり、極めて有名な原書である。

解體新書

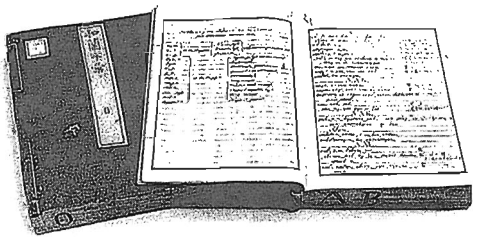


解体新書　全五巻

日本における西洋解剖書の最初の翻訳書で杉田玄白、中川淳庵、石川玄常、桂川甫周（前野良澤）らにより、全５巻として安永３年(1774)刊行された。原典はドイツのKulmusの解剖図表のオランダ版である。図譜は秋田藩士小田野直武の筆によるが、原画の精巧さをよく伝えていると、評価される。

和蘭字彙

幕末（安政年間）に刊行された著名な蘭日辞典で、編者は幕府侍医法眼桂川甫周である。本書は、加賀藩藩校で購入され、金沢医学館へ引き継がれオランダ書の解読に大変役立った。



芝蘭堂新元會図、通称オランダ正月

旧記念館廊下の座敷にかけられていた大幅（123 ×241糧）でかって旧記念館を活用した学生らには思い出される軸である。この軸は旧記念館の取壊しの際、片付けられ、以来所在が不明であったが発見されたので、昭和62年(1987)から記念館に飾る。

旧記念館は、金沢医学専門学校創立25周年に建設され、大正５年(1916)10月28日に盛大に開館された。この軸の正式名称は「芝蘭堂新元會図」で、開館当日、第一外科の下平用彩教授（十全会理事）が寄贈したもので、所有者大槻家が明治35年(1902)に複製し頒布した。原画は早稲田大学に所蔵されているが複製軸の現存は珍重である。

医人石膏像

古畑種基は初代法医学教授として大正13年(1924)に金沢医科大学へ赴任した。大正10年(1921)から赴任まで欧米に留学し、その間医大昇格に伴う医書雑誌を収集して大学へ送った。一方、ヒポクラテス、ウイルヒョウ、コッホなどの医人石膏像を求め、帰国後、法医学教室の廊下に並べ医学思想の教育の一助とした。

山碕幹高等官礼服

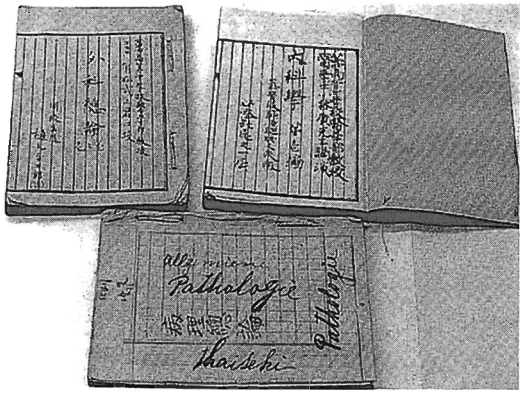
山碕幹は明治20年(1887)帝国大学医科大学卒業、松江病院長を経て、明治29年(1896)第四高等学校教授に就任、大正6年(1917)退官まで第一内科学教授として多大の功績を遺した。高等官二等、正四位、勲三等に叙せられた。後年、礼服一式が遺族より医学部へ寄贈された。

アツオトメトリー

大正末より昭和始めにわたり、ベルリン大学ローナ教授について医化学を修めオーストリア・グラーツ大学ブレークル教授について微量元素分析法、ドイツ・カイザーウイルヘルム生物学研究所マイヤーホーフ教授に細胞化学を師事して帰国した須藤憲三の高弟岩崎憲（のち医化学教授）は、「微量の窒素量を測定するには窒素ガスにしてその体積を計るのがもっとも確実」としてアツオトメトリーを創案した。

昭和28年(1953)岩崎は「アツオトメトリーの研究」で日本学士院賞を受賞し、戦後の本学研究陣に活力を与えた。

第四高等中学校医学部時代の講義録



以上のほか、顕微鏡、ミクロトーム各種、戦後処分され現存の少ない勅語、詔書、学校印、医学校卒業証書、明治初期の写真ガラス板、優等学生に贈られた銀時計、明治中期の講義録（写本）、誤嚥物標本、手製眼科診断装置、貴賓用調度品、旧校舎の鬼瓦、講義室、実験室で使用した調度品など多彩な物品が展示されている。

当資料室に展示されていない古医書の和書約1900冊、洋書約2300冊は既に古医書目録(1976)、同補遺版(1993)にまとめられており、医学図書館において保存管理され、広く利用が可能である。